

六十年前の災害から学ぶ 甲陵中学校

一年 跡部 由奈

私の住んでいる地域、武川町で起こった、三十四年災害から今年でちょうど六十年がたった。この災害では、私の家がある場所や、住宅街、学校などが流された。

三十四年災害とは昭和三十四年に起こった災害のことで、八月十四日朝八時に台風七号が武川町、白州所に被害をもたらした。この台風は伊勢湾台風とはまた別のものだ。富士

川に沿って北上し、山崩れ、川の氾濫を引き起こした。特に武川町では倒木により川の水がせき止められ、一時的にダムになり、その水が一気に町に流れ込んだ。あつというまに「武川銀座」と呼ばれていた大きな商店街を飲み込み、住人は逃げるので精一杯だったと聞いた。武川ではこの災害により亡くなった人が十三名。行方不明になった人が十名もいて、その多くが逃げ遅れた人だった。家屋はそのままの形で押し流され当時ではめずら

しい車も流された。この台風が去ってから町
を見ると、家があった場所に、大きな岩があ
り、砂が積もっていたりと、何も無い平ら地
になっっていたりした。その風景を見た時の人
々の気持ちはどうだったのだろうか。

六十年前の災害を知る人は少なくなると思
うが、私の住む町では、子供かう大入までが
知っている。なぜなら、地域の甲斐駒清流懇
話会という団体が伝えてくれているからだ。
小学校三年になると実際に大武川に行き、川

にっいて学び、災害を体験した方の話を聞き、
忘れてはいけないうとして学ぶ。当時大学
生で夏休みに帰省中の方の話が一番心に残っ
ている。お父さん、お母さん、お兄さんが土
石流に飲み込まれ、お兄さんは浅瀬に打ち上
げられ助かったが、お父さん、お母さんは、
川に流されてしまった。水が引いてから釜無
川の右岸をさがし、夏の日に照らされ、泥や
腐葉土、イノシシやタヌキの死骸の悪臭。毎
日、川岸を歩き、両親をさがしたこと。二週

間後に静岡の三ヶ川畑で女性の遺体が見つか
ったと連絡があり、確認へ行くと顔は分から
なかつたが、歯型ともんぺの模様が一致し、
お母さんと分かったこと。お父さんは今も行
方不明。生き残った子供七人で暮らして来た
そうだが、その方は祖父の幼なじみで、祖父は
「あいつは頑張り者」と言っていた。
もちろん祖父の家も流された。曾祖母は、
お産婆をしていたので病室も兼ねて建てたば
かりの家を流され悔しい思いをしたが命があ
って良かったと聞いた。

毎年八月十四日に夏祭りが開催される。災
害の次の年から行われている。災害の事を忘
れないためというのと、亡くなった方の冥
福を祈るといふ意味がある。災害について学
ぶ機会がたくさんあることが、知ることにつ
ながっていると思う。

今の大武川の上流には砂防えん提があり、
土砂が一気に流れていかないうちになつてい
る。この仕組みをいくつも作ることによつて

土石流の勢いをゆるめる役目をしてくれている。また、床固工という土石流の対策方法で川の流れをゆるやかにして、川がけずられ土砂が増えることを防ぐ工夫も見られる。釜無の方は昔よりも川幅が広くなり、一度に土砂がきても川が氾濫しないよう、たえられるように工夫してある。このような対策施設は最下流のみで三年かかり、昭和三十七年に完成した。その後上流の工事へと着手していく。また、川だけでなく、山の斜面にはコンクリートなどで固められた山腹工と呼ばれる部分もあり、山崩れや地すべりの防止対策になっている。

しかし、これらの対策だけでは完全に災害を防止することはできないので、災害が起こった時に、どうするべきかを考えて行動することが必要だと思う。避難所を確認しておくことや非常時に備え必要なものを用意しておくなどの自分でできる対策もまだあると思う。

この災害から六十年がたち、話を聞いたたり、
読んだりして、改めて災害は怖いと感じた。
しかも、身近な場所で起こったことだからな
おさう怖い。怖いと思うと同時にもしもとい
う危機感を持ちたい。私の通っていた小学校
では学び知ることも外でできるが、他の地域では、
この災害も知っている人は少ないと思う。地
域の災害を知るだけでなく、忘れないように
するために、多くの人に知ってもらうことも
大切だ。そして、六十年前の教訓を、今後ど
のように生かしていくのかも、これからの課
題だ。今、自分にできることを考え行動して
いこうと思う。